

社会科

社会とのかかわりを実感を持って考えられる社会科授業

～子供が切実感のある話し合いから学び、社会の中での自分の在り方を考えられる授業の追究～

今年度は、3年間の研究のまとめとして、子供たちが本当に切実感を持った話し合いをするために、子供たちが持ち寄った資料を話題の中心として生かしたり、互いの主張を共有できる座席プリントを活用したりしてきました。また、社会とのかかわり方についても発達の段階を考慮し実践してきました。これらの成果を、子供たちが互いに応え合う話し合い活動で発揮できるよう研究を進めてきました。（社会科主任 川口 英利）



1 研究の経緯

本校社会科部では、表面的な言葉や主張に終始して形骸化した表現に陥らない社会科、活動の姿や表現は地味でも子供一人一人が根の部分で質的に高い考えを持ち続けていると言えるような社会科を目指して、研究主題の「社会とのかかわりを実感を持って考えている子供の姿」を次のように設定し、研究第3年次に至った。

ア 自分で調べたことと友達の見解を関連付け、自分と社会を結び付けて考えられる子供
イ 進んで問題意識を持ち続け、自分が社会とかかわれる方法で表現する子供

これまで、研究主題の「実感」に込める授業の形として「子供たち自身の手による主体的な話し合いや追究活動」を実践してきたが、今年度は新たな方向性を加え、3年間の研究を総括する授業の在り方を目指したい。そして「社会とのかかわり方」については、発達の段階や単元によって子供の実態の姿を見つめ、その実態をとらえて、かかわり方を明らかにしたい。

2 全体提案との関連

(1) 子供が学びの価値を味わい、自ら学びをつないでいく授業を創る

今年度の全体提案を受け、「学びの価値を味わう授業像」を「自分の身の回りにある様々な社会的事象に対して、自ら問題意識を持って追究し友達の見解とを関連付けて考え、自分の生活と実社会とのつながりがあることに気付く授業」と設定した。「集団での学びを楽しむ活動の工夫」と「子供が自ら学びをつないでいくこと」という観点に関連させ、話し合いの充実を図っていききたい。

(2) 学ぶ活力を育む工夫を通して、学びへの主体性を高める

「自ら学び合う仲間を創るための工夫」という観点に関連させ、友達のを考えをもとにした話し合いを充実させることで、学びへの主体性はもとより、学びの質をも高めていく授業を目指したい。

3 新学習指導要領との関連

新学習指導要領で強調されている観点からは「書く」「論述する」ことが、これまでの研究に付加していくべき大切な要素であると考えた。ただし改訂後も「公民的資質の基礎を養う」という大きな目標は変わらないことを踏まえ、本校社会科の「社会とのかかわり方を考える」研究の方向はこれまで通りとし、さらに発展的に考えていきたい。

4 研究の方向

これらのことから、今年度は副主題を「子供が切実感のある話し合いから学び、社会の中での自分の在り方を考えられる授業の追究」とした。

研究第3年次の今年度は「話し合い」の最終形として一層学び合いが深まるように友達の声に「応える」ことで子供同士が響き合い学び合える受容的な話し合いを目指したい。また、子供たち自身の手による追究資料をもとにして社会とのかかわり方を考え、子供たちが学び合える学習活動を工夫する。この時の教師のかかわり方を一層工夫し、子供からの資料を活用しつつも教師による有効な支援により、社会的事象を深く思考し、問題意識を持ち続けて考えられるようにし、このことによって社会の中での自分の在り方までも考えられるようにしたい。

これらのことを踏まえた上で、研究内容を次の2つの柱として位置付けた。

- (1) 切実感のある話し合いをもとに様々な社会的事象の見方・考え方を学び合えるようにすること
- (2) 社会的事象に対して問題意識を持ち続けることができるようにすること

研究の内容(1)では、話し合いを中心とした学び合う授業の新たな手法とその工夫点について提案する。(2)では、社会的事象に対して問題意識を持ち続けられるようにする学習活動の工夫や社会とのかかわり方について発達の段階に応じて述べていく。

5 研究の内容

(1) 切実感のある話し合いをもとに様々な社会的事象の見方・考え方を学び合えるようにすること

切実感のある話し合いとは、子供たちが真剣に社会的事象について考え、一人一人の価値判断をぶつけ合ったり自分の意思決定に悩んだりする話し合いだと考える。また、静かに友達の意見に耳を傾けて自分の考えを持つことができる態度も切実感のある話し合いでの姿ととらえたい。そこで、切実感のある話し合いのため、そして話し合いからよりよく学び合えるようにしていくための手立てについて述べていく。

ア 友達の意見に応じていくための支援の工夫

話し合いを柱にした研究をさらに発展させていくためには、話し合いを質的に上げていくことだと考え、それを子供同士の深い学び合いに求めた。それは、友達の考えに「応える」スタイルである。友達の意見をよく「聴く」こと、そしてさらに踏み込んで分からないことをたずねたり聞き返したりする「訊く」ことも友達に対して「応える」ことに内包されるであろう。ここで「応える」というスタイルに、友達の考えを受容的にとらえる意味を見出し、そこに焦点を当てて考えていきたい。社会的事象に対する友達の考えや気持ちを受け入れ、自分のものとして取り込んでいく。このようにして友達の発言を認め自分の考えをよりよくしていくことができたなら、話し合いは子供にとってより切実感のあるものとなっていくのではないかと考えたのである。具体的な子供の姿としては、友達が出したいいくつかの意見に対して総括的な考えや、友達の考えに共鳴したことと絞った意見を話す姿を想定している。このような発言内容や姿を全体へ賞賛し広めていくことで友達の意見に応じていくように支援したい。

イ 自分の考えを要約し、友達と伝え合う学習活動の工夫

友達と学び合うために、聴き合い、訊くことができ、さらには応えていくというその過程で、自分の考えを要約して伝えていく学習活動を取り入れることで、話し合いでの学び合いが一層高まっていくと考える。従来から活用してきた『社会と生活かかわりブック』を新しい方法で活用するのである。具体的には、授業の終わりで、付箋紙に「予想」「調べたいこと」「分かったこと」や「自分とのかかわり・感想・疑問」を要約して書き、座席順や追究テーマごとに貼り出して提出する。子供たちがとらえた社会的事象に対する様々な考えを教師は事前に把握でき、次時には、全員に発言する機会を与えることができる。そして、次時の最初に子供たちの手元にこの座席プリントを配付することで、友達がどんなことを考えたかを知ることができる。このことで、話し合いから学び合うことができるという意識も芽生え、友達の意見を一層よく聴き、意見についていろいろと訊くこともできるようになるだろう。話し合いは、自分や友達の考えを交流し合い、自分の考えを変容させていく好機である。

また、単元の終末には、友達の考えも生かし学習を総合的にまとめるために、レポートを書

えにくい社会の仕組み・意外と知られていない人々の苦勞といった子供たちの追究で普段届かない事柄や、ルールや法及び経済的な見方などの新たな切り口に注目して、我々教師が子供たちの持っている考えや資料を掘り起こすこともできる。

イ 社会を見る目を育てる教材開発のポイント

研究主題に述べている実感を持った社会とのかかわり方はどのようなものか。研究第3年次にあたり、その点を明らかにしなくてはならない。今年度は、これらオープンエンドの在り方や小集団でのかかわりを工夫したこれまでの研究をもとにして、社会とのかかわりについて考えを深めたい。発達の段階で、また単元内容によってどのように社会を見て、我々教師がどう分析して授業で表出させたり、かかわりを持たせたりしていったらよいか提案していく。ポイントを大局的にまとめれば、実社会への発信ありきの単元構成をしないということと、子供たちの実態と発達の段階と単元内容をよく踏まえた上で、社会とのかかわり方を考えることが大切だということである。なお、ここで例示する単元については、「発信」や現実の社会への活動が難しいと考えられる内容の教材開発や学習活動での在り方を示したい。

《3年生》社会的事象に対して狭い範囲である自分の身の回りや自分の生活経験と比べて関連や類似点を見出そうとする段階である。社会科初年度ということもあり、よく社会的事象を観察・見学して自分を意識して自分とのつながりで考えて述べたり書いたりすることが大切である。追究した対象へ直接的に発信していくこともできるが、「〇〇について自分は…」というフレーズを強調した記述や意思表示を授業で継続していきたい。

【実践例】「学校のまわりたんけん」では、見学したことをもとに友達と話し合い、「〇〇通り」のタイトルを「栃木県のシンボルだよ、道幅広いぞ大通り」と自分の言葉で考える活動を行った。3年生が社会とかかわる姿になると判断した。

《4年生》社会的事象に対して客観的に向き合うことができくる段階である。身の回りの生活を支える仕組みを学ぶ単元内容が多いことから、自分でできることの意味表明や自らの社会参加を直接的に提案する学習活動が期待できる。そのための有用な資料収集も進んでできるようになる。直接提案もよいが、社会的事象に対して自分のこととしてどうしたいのかをしっかりと記述したり、表明したりできるようにさせたい。その上での提案ならば、子供の思いに応じて学びを広げていきたい。

【実践例】「ごみ」「水」「消防」の学習は自分の考えを発信しやすいが、それだけでなく「栃木県」の学習で、地域に生きる人々の思いや生き方に触れ、自分の意思表示や今後の地域の在り方にまで言及することも大切な学習活動であると考えた。そこで単元終末に「益子町発展への道」や「日光市もっと発展プロジェクト」などの話し合い活動を行った。

《5年生》対象とする社会的事象の範囲が広くなり一般化する内容が多いが、学習内容を自分の生活から具体的な情報として見つけることができる段階である。一般的で見えないことや抽象的な事柄の把握もできるようになり、大きな実社会と自分の生活との関連を考えられるようになる。国レベルの政策や社会の有り様であっても、自分の思いや感情までもかかわる人の思いに関連させて記述したり表明したりすることができる。そうしたことを学び、変容する自分も表現させたい。

【実践例】「公害」の学習では、被害に遭った人々の思いや加害者の立場もとらえて、それぞれの立場での自分の見解を持つということは大切な学習活動だと考えた。そこで、水俣病での様々な立場の人々の主張を明らかにして話し合った。

《6年生》歴史学習が大半であるが、学習内容と実社会の時事問題（社会的事象）との比較検討ができる段階である。時間や空間を超えて学習内容を自分の身近なものとしてとらえて考えることができる。自分の意思決定に照らして友達の別の意見を吟味することもできるようになる。特に、政治的な見方・考え方は歴史学習の段階から意識して学ばせたい。実社会との関連をレポートに表現させたり、現時点での自分の考えや将来の実社会での自分の在り方を展望させたりする表現も考えられる。

【実践例】「明治維新」の学習をする際に、聖徳太子の時代と比較するとともに現代の政治状況と照らして考えるようにした。これにより、後の公民分野での政治の仕組みや政治に対する考え方を持つことができるようになった。

以上のように、子供たちの発達の段階をとらえた上で、各学年の学習内容に応じた社会とのかかわり方を考え教材開発したり学習活動を設定したりする必要がある。

6 成果と課題

子供が自分で調べたことや生活経験、友達の意見や資料を、我々教師が大切に、授業で有効に活用していくことで、子供の社会的事象への意識は切実感のあるものになった。今後は、大きな社会の中での自分の在り方を子供自身が一層自覚しながら学習し、自分の生活を振り返っていける単元展開や教材・学習活動の工夫を考えていきたい。